

特集 2. 決定版！高断熱・高気密が浸透しない本当の理由

第 1 回 日本人の温熱環境スキーマ**

平成 20 年 11 月 11 日

□ 内面から捉え直す

前回の「特集 1」では、ヒトの思考特性について心理学的な解説を行ってきました。今回の特集からは、前回までの知識を踏まえ、実際の家づくりにおける問題点について、生理・心理的な考察をしていきたいと思えます。

まずは初めに、今回は「住まいの高断熱・高気密化」という問題点について取り上げたいと思えます。

□ 進まぬ住まいの高断熱・高気密化

近年の地球温暖化、環境問題の深刻化に伴い、住まいの環境性能に対する関心も徐々に高まりつつあるように思われます。実際に、住まいを高断熱・高気密化するケースも、わずかではありますが増加傾向にあります（図 1）。

しかし、その割合は 3 割程度にとどまっています（図 1）。言い換えれば、現在でも新設住宅の約 7 割もが、高断熱・高気密化されていないのです。

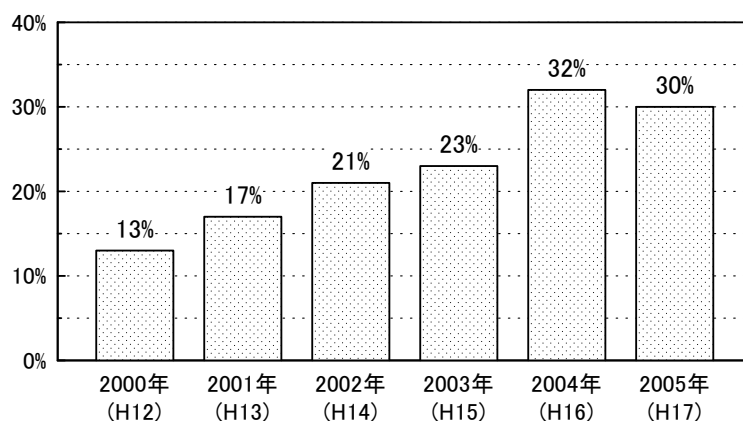


図 1 新設住宅の次世代省エネ基準†適合率

次世代省エネ基準を満たさない住宅は、高断熱・高気密化されていないといえます。

** 初めて記事をご覧になる方は、必ず「[利用規約](#)」をご確認ください

† 最新の省エネ基準。ただし、この基準だけでは十分な断熱・気密性能を発揮しないとの意見もあります。

□ なぜ浸透しないのか

もちろんこのような事態に対し、専門家や技術者は真剣に対策を講じています。例えば、市民向けの勉強会を開いたり、コスト対策の研究などを続けているのです。

しかし、そんな努力の甲斐もなく高断熱・高気密が浸透していないのは、結局はいまだに「その必要性やメリットが理解してもらえない」ためだと思われるのです。

□ 既有知識と理解の壁

「適切な情報を伝え、十分なコスト対策をしても必ずしも高性能な空間を求めない」。こうした実情に対し「だから日本人はダメなんだ」と嘆く専門家もいます。しかし、日本人はダメなのではありません。なぜなら、日本人が高断熱・高気密の特徴やメリット理解できないのには、ちゃんとした生理・心理的な裏づけがあるからです。

では、その裏づけとは何なのでしょう。先に結論を言ってしまうと、それは多くの日本人が、従来型の住居生活の中で「**低断熱・低気密住宅でも問題が無い・不自由しない**」という知識を有してしまっていることにあるのです。

鋭い方はお気付きかもしれませんが、ヒトには既存の知識体系（スキーマ）に照らし合わせて、物事を判断する傾向があります（スキーマ理論[†]）。

それゆえに、どんなに熱心な説明を受けても、過去の経験や知識から「でも、今住んでいる従来型の家でもあまり不自由していないし…」などと悩んでしまうのです。

□ なぜ低断熱・低気密で問題が無いのか

もちろん、住まいを高断熱・高気密化するかどうかは消費者の判断によります。しかし、「低断熱・低気密でも別に問題が無い」という知識（スキーマ）の影響下では、温熱環境に対する理解や判断にどうしても偏りが生じてしまうのです。

こうした事態を避けるには、まずはなぜ我々が「低断熱・低気密でも問題が無い」という知識（温熱環境スキーマ）をもってしまいがちなのか、「真の原因」を知る必要があるのです。

[†] 「特集 1. 第 1 回 [家づくりにおける既有知識の役割](#)」を参照

□ 非定量的な 2 つの原因

立場を変えて言えば、この「真の原因」を理解していないからこそ、専門家や技術者は高断熱・高気密化のメリットや特徴をうまく伝えられていないのです。実はこれも、高断熱・高気密化が日本で浸透しない大きな理由のひとつだとも思われるのです。

彼らがこの「真の原因」に対して無理解な理由はきわめて単純です。それは気温、湿度、気密値などの定量的（数値化可能）な（環境の）情報にばかり注目しているからなのです。つまり、温熱環境に対する生理・心理反応などの内的情報を軽視しすぎているのです。

2 つの生理・心理的要素

- 1. 環境に対する「慣れ」(habituation)
- 2. 「場所への愛着」

このことを示すためにも、今回の特集では、あえて数値化困難な 2 つの生理・心理的要素を用いて、日本で高断熱・高気密化が浸透しない本当の理由について解説していきたいと思えます。

[次の記事へ](#)

* 記事の感想をお聞かせください

[アンケート画面へ](#)